

外食の思い出



幼い頃、月に一度父は仕事を早く切り上げ、家族は揃って食事に出席した。行く場所は、決まって駅前の老舗のホテルの中にあるレストランで、メニューはいつも皆同じくして父が決めたオニオンスープとステーキだった。

大きめのスープ皿から淡い湯気のたつオニオンスープは、形がわからぬほどとろとろに煮込まれたたまねぎが入っており、口の中に入ると、ふわり、そしてつるんと淡雪が溶けるように舌の上からのどの向こうの奥へと消えていく。上品で軽やかな楽曲が、小さな私の体の中を、駆け巡っていくかのようだった。

その心地よさは本当にたまらないもので、スプーンですくっては口に含むという行為の連続は至極の充足感があり、私はゆっくりとそれをスープ一皿分堪能した。

片や食べるのが早い父は、私がスープを飲み干しようやくステーキに移る頃には、分厚い肉をきれにたいらげ、満足げな顔を見せていた。母といえば、そんな父の隣で終始目を細め、ニコニコという言葉がぴったりくるような微笑みを見せていた。私はこのレストランでの時間を何故か色鮮やかに思い出すことができる。もう何十年も前の昔のことなのだが、私の中で、このシーンは、セピアがかかることがない。朝も夜もなく、仕事三昧であった父とゆっくりしていたところを見たことのない母がスープから立ち上る暖気越しに二人並び私の前で笑っていてくれることが、相当に嬉しかったのだろうか…今はそんなふうに見える。あたたかく、甘く、やさしい味わいであったスープと同じくらい、いやそれ以上のあたたかさで包まれていた当時の幸いを、私は、幼いながらに体でしっかり受け止めていたのだろう。

いつからか、家族はそのレストランへ行くことがなくなり、今はもうその場所は違うレストランになっている。私はといえば、自らが妻・我が子らを誘い、食事に出席する身上になった。そして何故か、子供のお気に入りには、スープである。